

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520473

研究課題名（和文） 景頗語と日本語の「格助詞・副助詞・係助詞」の対照研究

研究課題名（英文） A contrastive study of case markers, focus markers, and topic markers
in Kachin and Japanese

研究代表者

張 麟声 (ZHANG LINSHENG)

大阪府立大学 人間社会学部・教授

研究者番号：80331122

研究成果の概要（和文）：

格助詞、副助詞、係助詞は、互いに直接接続することができ、緊密な繋がりを持つ。本研究では、2010年までに行った係助詞の対照研究に続き、景頗語と日本語における格助詞と副助詞の対照研究を行い、その上で、3種類からなる両言語の助詞体系の異同について記述を行った。慎重な調査を経て、景頗語の格助詞と副助詞を先行研究より綿密に記述できたこと、また、日本語との対照研究を通して、SOV型言語の助詞体系の多様性と類型的特点を示せたことが、主な成果である。

研究成果の概要（英文）：

There is a close relationship between case markers, focus markers, and topic markers as they can directly be attached to each other. This study contrasted case markers and focus markers in Kachin and Japanese, a follow-up to the contrastive study of topic markers in the two languages that I conducted up to the year 2010, and described the similarities and differences between the three types of markers in the two languages. The primary contributions of this study are that (1) it described markers of case and focus in Kachin more thoroughly than previous studies did and that (2) it revealed, through the comparison of Kachin and Japanese, the variation and typological characteristics of SOV languages.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：文法

- 研究開始当初の背景
(1) 現代日本語の「格助詞・副助詞・係助詞」

に関する記述的研究は、ほぼ完了している。

(2) 類型論的な発想が浸透し、その刺激により、係助詞＝主題マーカの対照研究が試みられはじめている。日本語とたいへん似た主題マーカを持つ言語として、朝鮮語のことは、すでによく知られている。また、その朝鮮語に次ぐ三番目の言語が、中国、ミャンマ、インドの三カ国にまたがって話されている景頗語であることを、研究代表者の研究や紹介によって、少しずつ明らかにしてきている。

(3) 景頗語の格助詞や副助詞に関する記述的研究は、中国語の伝統的な文法書に則って書かれた戴慶廈、徐悉艷(1992)及びそのバージョンアップした戴慶廈 (2012)だけである。これらにおいて、格助詞は、格という概念を用いずに、目的語助詞、連体修飾語助詞、連用修飾語助詞のような名の下で、研究が行われている。目的語助詞には **hpe**、連体修飾語助詞には **ai**、**a** と **na**、そして、連用修飾語助詞には、動作主を表す **e** と道具を表す **hte** の、合わせて3種類6形式が、取り上げられている。また、副助詞については、助詞の一種ではなく、副詞として取り扱われている。

2. 研究の目的

(1) 2007 年度－2008 年度の基盤研究(C)において究明された景頗語と日本語の「係助詞＝主題マーカの対応関係に続き、両言語の「格助詞・副助詞」の対照研究を行い、その性格の異同を明らかにする。

(2) 山田孝雄博士が示した日本語の「格助詞・副助詞・係助詞」の体系が景頗語に当てはまるかどうかを検討し、SOV型言語の類型的性格の一端に迫る。

3. 研究の方法

(1) 対照研究ではあるが、基本的に記述的研究の手法を用いた。具体的な手順については、以下の(2)と(3)を参照されたい。

(2) まず日本語の格助詞、副助詞の体系に基づいて、景頗語に関する先行研究の成果を整理しなおし、その不備を突き止めた。その個々の不備に関して、具体的な研究テーマを設定し、自分で開発した小型コーパスを利用して考察した。考察して得た仮説的な結果を、景頗語のネイティブである岳麻腊氏の援助を借りて検討し、より十全な記述を行った。

(2) 上述の研究によって得た景頗語の格助詞、副助詞の体系をもって、日本語と対照研究し、その異同を明らかにした。その上、両言語のデータを用いて、SOV型言語の類型的特徴について検討した。

4. 研究成果

以下、(1)格助詞、(2)副助詞、(3)「格助詞・副助詞・係助詞」の体系という三項目に分けて、報告する。

(1) 格助詞について

以下、(1-1)～(1-4)は、先行研究で目的語助詞、連体修飾語助詞、連用修飾語助詞として取り上げられている六つの形式について議論した部分であり、そして、(1-5)～(1-8)は、本研究において新たに格助詞として加えていく形を話題にした項目である。

(1-1) 目的語助詞と言われている **hpe** は、二項動詞構文においては、動作の対象も言行動の相手も表すことがあり、日本語の「を」と「に」の両方に対応する。ただし、三項動詞の構文においては、直接目的語と間接目的語がどんな順序で並べられるかにかかわらず、間接目的語にしか付くことがなく、「に」だけに対応する。

(1-2) 連体修飾語助詞として、**ai**、**a**、**na** という三つの形が取り扱われているが、一つの **ai** は、本来形容詞と動詞の語尾である。形容詞と動詞が名詞を修飾するときに、形容詞、動詞の語幹と名詞の間に「現れる」ので、日本語のような SOV 型言語のことを知らない研究者には、助詞のように見えたのだと思われる。本研究の結論として、この **ai** は格助詞として扱うべきではなく、したがって、日本語の「の」に対応するのは、**a**、**na** の二つである。そして、この二つにおいて、**na** は時間名詞と場所名詞だけを受け、それ以外の名詞が名詞を修飾するときには、**a** が使われる。

(1-3) 動作主を表す助詞である **e** は、他動詞構文における動作主を表すのにしか使われない。したがって、「が」と部分的に対応はするが、全体としては、性格が大きくことなる。一方、景頗語には受動文がなく、日本語の受動文の意味を、「N_{対象}+N_{動作主}+e+他動詞」という構文で表すため、この **e** は、日本語の受動文における動作主マーカの「に」に似通っている一面を持つ。さらに、この **e** は、「部屋に」や「3時に」における「に」のように、場所名詞や時間名詞の後について、場所や時間を「点」としてとらえる機能も持つ。

この **e** も、上述の①で検討した **hpe** も、「に」に対応するケースが見られるが、その分布は相補的である。**hpe** はものや情報の受け手としての人間名詞や動物名詞の後にしか付かず、一方、**e** は動作主としての人間や動物を表す名詞や無生物の名詞句に用いられる。

(1-4) 道具を表す **hte** についての先行研究

の記述は適切であり、the は「で」に相当する。

(1-5) 「から」に対応し、起点を表す形に景頗語には **nna** がある。この **nna** は、先行研究では、複文における並列関係や因果関係を表す助詞として取り扱われている。そうされた理由は、**nna** が、「彼は賢いしたくましい」における「し」や「分からないから、あなたに聞かんだ」における「から」のような意味を持ち合わせているからである。しかし、並列関係や因果関係を表す助詞にされてはいるものの、先行研究においては、この **nna** の、場所名詞や時間名詞の後について、移動や時間の起点を表す用法についても述べられている。したがって、日本語の研究における「から」のように、二大用法を別々にして、それぞれ格助詞と接続助詞として立てられるべきだと考え、その用法の一つを格助詞として扱う。

(1-6) 「から」に相当する形はあるが、「まで」に相当する助詞は景頗語にない。したがって、「家から大学まで約 3 キロだ」のような意味を「家から大学 約 3 キロだ」のように表現している。

このことから、起点提示用法と原因提示用法において、「から」に完全に対応している **nna** が、なぜ上述の「彼は賢いしたくましい」における「し」にも対応しているように見えるかの理由が分かってくる。つまり、「家から大学まで約 3 キロだ」のような意味を「家から大学 約 3 キロだ」のように表現するから、「彼は賢い **nna**、たくましい」というセンテンスに関しても、彼は、賢い性質からたくましい性質まで持ち合わせていると理解することができ、この場合でも、**nna** は、あくまで起点を提示しているのである。先行研究のように、並列用法として記述されてもよいが、そのような並列用法はこういうところから生まれたのだと言うことができる。

(1-7) 日本語では、「から」と並んで、文体的に比較的固い起点表示の助詞に「より」があり、その一用法が「彼は彼女より高い」のように、比較構文における述語とその要求する名詞句との関係を表すことになっている。一方、景頗語の起点提示助詞である **nna** は、ここまで意味拡張をしていない。景頗語の比較構文における被比較者を提示するマーカーに、「の上」の意味の形式が用いられる。「彼は彼女より高い」のようなセンテンスの意味を、景頗語では、「彼は彼女の上高い」のように、表すのである。

(1-8) 日本語では、名詞と名詞を繋ぐのに「と」が使われるが、この「と」に対応する

形として、景頗語に **hte** がある。道具、手段を表す **hte** と形は同じであるが、先行研究では別々に記述されている。対義語なのか、それとも、形が同じ二つの単語なのか、現時点では分からない。

(2) 副助詞について

副助詞については、限定と極限の二種類に絞って調べた。景頗語の、限定を表す形式に **sha**、**chyu** と **hkrai** があり、極限を表す形式に **pyi** があるが、先行研究では、中国語における同じ意味を表す語の品詞性を参考にしたらしく、いずれも副詞とされている。しかし、副詞であれば、景頗語の副詞も「彼はハンサムだし、また、大変賢いので、……」における「大変」のように、節の頭に来ることがあるが、上述の四つの形は、そのように用いられることはありえず、名詞句などの後にくっついて使われるだけである。したがって、日本語のように、一種の助詞とすべきだと本研究において主張した。そして、両ケースにおける景頗語と日本語との異同については、以下、(2-1)と(2-2)に分けて述べる。

(2-1) 限定を表す副助詞

sha、**chyu** と **hkrai** からなる景頗語の限定を表す副助詞全体の意味・用法の体系を、日本語と比べると、次のようなことが言える。

i 個体を限定することにおいて、**sha**、**chyu** と **hkrai** の三形式のそれぞれ一部の意味・用法が、「だけ」「しか…ない」「ばかり」三形式のそれぞれ一部の意味・用法にあたる。

ii 類を限定することにおいて、景頗語では **hkrai**、そして、日本語では「ばかり」が用いられる。

iii 景頗語の **sha** は形容詞の後について、程度が低いことや数量的に少ないことを表すが、日本語の「だけ」「しか…ない」「ばかり」三形式のどれにもこのような意味・用法はない。

iv 景頗語の **sha** は時間名詞の後について、時間が近い過去であることを表すが、日本語の「だけ」「しか…ない」「ばかり」三形式のどれにもこのような意味・用法はない。

(2-2) 極端を表す副助詞

文体的に古い「すら」を計算に入れなくても、現代日本語には、「でも」、「さえ」、「まで」などがあるが、景頗語には、**pyi** の一つしかない。したがって、「でも」、「さえ」、「まで」のいずれにも対応することになる。

(3) 「格助詞・副助詞・係助詞」の体系

この場合は、2007 年度－2008 年度の基盤研究(C)において考察した景頗語の **go** と日本語の「は」、及び、景頗語の **mung** と日本語の「も」のことも加えて検討することになる

が、まず全体として、両言語が大変似た「格助詞・副助詞・係助詞」という体系を持っていると言える。このように考える理由を以下三点に分けて述べる。

- A. 一部の SOV 型言語の格標識は、名詞の屈折的变化で担っているが、景頗語でも日本語でも、膠着的な後置詞が用いられている。
- B. 限定を表す副助詞に関しては、一部の SOV 型言語では一つしかないが、景頗語も日本語も二つ以上持ち、そして、「ケーキを一個だけ食べる」のように個を限定する用法と、「ケーキばかり食べている」のように種を限定する用法を別々の助詞が担っている。
- C. 一部の SOV 型言語には係助詞＝主題マーカがない。また、係助詞＝主題マーカを持つ SOV 型言語においても、その主題マーカは、名詞述語文や形容詞述語文のような属性叙述の主題にしか付かない言語が多いが、景頗語の係助詞＝主題マーカも、日本語の係助詞＝主題マーカも、「パンはわたしが食べた」のように、事象叙述の主題にも付く。

さらに言うと、SVO 型言語においては、格標識としての助詞は前置詞であり、限定や極端を表す形は、拘束形態素である助詞ではなく、自由形態素の副詞になる。また、普通主題マーカを持たないとされている。景頗語や日本語のような言語は、このような SVO 型言語の性格とは正反対であり、典型的な「格助詞・副助詞・係助詞」という助詞体系を持つ SOV 型言語だと言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 張麟声、景頗語の限定助詞 sha, chy と hkraisha について、大阪府立大学人文学会『人文学論集』、査読無、第 31 集、2013 年 03 月、pp. 221-230
- ② 張麟声、景頗語の限定助詞 sha について、大阪府立大学人文学会『人文学論集』、査読無、第 30 集、2012 年 03 月、pp. 131-142
- ③ 張麟声、景頗語の「ai」の文法的性格について、大阪府立大学人文学会『人文学論集』、査読無、第 29 集、2011 年 03 月、pp. 163-172
- ④ 張麟声、「は」のような主題マーカと言語語順との相関関係について、proceedings of the Thirty-Fourth Annual Meeting of The kansai Linguistic Society 2010、査読有、2010 年 06 月 pp. 254-265

[学会発表] (計 1 件)

- ① 張麟声、景頗語の「ai」の文法的性格について、中国民族言語学会第 10 回国際シンポジウム、2010 年 8 月 6 日、北方民族大学(中国銀川市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

張 麟声 (ZHANG LINSHENG)
大阪府立大学 人間社会学部・教授
研究者番号：80331122

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：